

発表題目 非存在の価値と福利の性質

氏名 吉沢 文武 (Fumitake Yoshizawa)

所属 工学院大学

私たちは通常、早く死ぬことは長く生きることより悪いと考える。誕生についても、生まれてくることが生まれてこないことよりよいとかより悪いとかといった判断をしているとみなせる場合がある。このような評価は、ある主体が死ぬことや生まれないことによつて非存在であることが、比較可能な何らかの水準の——自然に考えれば、ゼロの——当の主体にとっての価値をもつという考え（ゼロ説）を前提しているように見える。しかし、この考えは本当に意味をなすのだろうか。たとえば快樂説のもとで、主体に快という心的状態が生じている場合には、その主体がもつ福利の水準は正であり、苦痛が生じている場合には水準は負である。そうだとすると、主体が存在せず、快も苦も一切生じない場合には、福利の水準は定まらない（無規定説）のではないか。もしゼロ説でなく無規定説が正しいのだとすれば、冒頭のような比較に基づく評価は成り立たないことになる。これが「非存在の価値の問題」である。

本稿で私は、ゼロ説を支持する形而上学的なアプローチを検討する。とくに、ニール・ファイト (Feit 2015, “Comparative Harm, Creation and Death”) による提案を批判的に精査する。ファイトによれば、主体 s がゼロの福利をもつという命題を真にするのは、ある特定の性質を s がもつことではなく、ある特定の性質——快苦が生じているという性質など——を s がもたないことである。まず、命題の真理を世界（や時間）に相対化することで、内的 (inner) 真理と外的 (outer) 真理の区別 (Fine 1985, “Plantinga on the Reduction of Possibilist Discourse”) が可能である。この区別のもとで、 s は存在しないという命題は、 s が存在しない可能世界に内的には真ではないが、外的には真である。ファイトによれば、それと並行的に、快苦が生じているという性質やその他の性質を s が一切もたないことによつても、 s がゼロの福利をもつという命題は、 s が存在しない世界や時間に外的には真である。

だが、私の見るところ、この提案はうまくいかない。本稿で私は、存在と他の性質は結局のところ並行的ではないし、この提案のもとでは、福利の性質という概念自体を捨て去る必要があると論じる。さらに、ある世界と時間において主体が性質をもつにはその世界と時間にその主体が存在していなければならないという、広く（ときに無批判に）受けいられている原理を否定する方針こそが、ゼロ説にとって有望であるという——その意味において、マイノング主義的な方向に進む必要があるという——示唆を行ないたい。